反應モ認メズ。

診斷。

打診反應ナシ。金屬ニテ充填物ヲ避ケテ打診スルニ反應ナク充填物上ニテ直接ニ打診スル時ハ極メテ微弱ナル流電作用行ハル。金屬ニ代フルニ木製ノ器具ニテ打診スレバ何等變化ヲ認メズ。

亦該齒牙ニ「ラバーダム」防濕法ヲ施シテ充填物ニ接觸シタル時ハ何等ノ疼痛ヲ覺エズ、該疼痛ハ流電作用ノタメ電擊性苦痛トシテ感ズルモノニシテ疾病ニアラズ。

X線診査。

該齒牙ハ生活齒ニシテ髓腔天蓋近クマデ充填物ハ深く存ス。

「ガルバニックアクシオン」ニヨル疼痛。

處置。

「ラバーダム」防濕法ニヨリテ充填物ヲ撤去シ根管治療後目下金

「インレー」ノ窩洞形成中ナリ。

抄 録

本號抄録擔當者（イロハ順）

巖 眞 教	中村 平藏
長 尾 優	金森 虎男
川 上 政雄	高橋 新次郎
檜 垣 麟 三	檜 山 健 兒

齒科基礎醫學

齒根膜幅員ノ系統的研究

Systematische Untersuchungen über die Periodontalbreite.

Dr. Alexander Klein. (Leiter Doz. Dr. B. Gottlieb, Wien)

Zeitschrift f. Stomatologie, 1928 H. 4.

齒根膜ノ幅員ニ關スル報告ハ唯斷片的ニ文獻ニ見出シ得ルニ過ギズ、例ヘバゴットリープ氏ハ「齒槽膿漏ノ原因ト療法」ト題スル研究報告中ニ、其ノ最小ノ場合十六分ノ一耗ニシテ、齒根膜ガ病的ニ擴大サレイル場合ニハ十六分ノ七耗ノ幅員ヲ示スト云ヒ、又ウエスキ氏ニヨレバ、完全ニ普通ナリト見做シウル齒根膜ノ幅員ハ、齒牙ノ中央部ニ於テ、平均上顎〇・二乃至〇・二五耗、下顎〇・

一五乃至〇・二三耗、尙最小ノモノ〇・〇一五耗、最大ノモノ〇・八乃至一・〇耗ナリト。

著者ハ先ヅ百五十本ノ齒牙ニ就キテ、九五〇箇所ノ測定ヲ行ヒ、尙此ノ結果ヨリ色々ノ觀察ヲ下セリ。而シテ測定セル齒牙ハ、年齡十九歳ヨリ五十歳マデノ間ノモノニシテ、旨ク齒根端ヲ縱斷セル切片ヲ選ンデ之レヲ使用シ、又測定セル場所ハ(一)齒槽突起緣、(二)齒槽突起緣ト根尖端トノ中央部、(三)根端近キ部(以上三ヶ所ハ近遠心側ヲ測定セリ)、(四)根端ト齒槽窩底トノ距離及ビ(五)根分歧部ノ五ヶ所ナリ。

而シテ切片ノ方向、切片ノ破裂等ノ障礙ノ爲メ上記ノ個所ヲ毎回測定シ得ズ、齒牙中央部ヲ最モ屢々測定セル結果ヲ招來セリト。

(一)先ヅ第一年齡ト齒根膜幅員トノ關係ヲ見ルニ、上下顎ヲ通ジテ平均スレバ、若年者二十乃至二十五歳ノモノハ〇・二三耗、老年者(四十乃至五十歳)ノモノハ〇・二五耗ナルモ、更ニ上下顎別々ニ觀察スルニ、下顎ニテ平均老年ノ方其ノ幅員ノ六分ノ一程若年ノモノヨリ厚ク、上顎ニテハ兩者間殆ンド相違ナシ、反之齒槽突起緣ノミヲ觀察スルニ、此ノ部ニテハ上下顎共若年ノ方老年者ヨリ厚シト云フ。

(二)上下顎ヲ通ジテノ平均ヲ見ルニ、上下顎同等ニシテ〇・二五耗

ヲ示ス。

(三)齒牙ニシテ作用ヲ營ミ居ルモノノ内、兩隣接齒ヲ缺如セル單獨齒ハ平均シテ齒根膜幅員最モ厚ク、〇・二八耗ヲ示シ、一側ニノミ隣接齒アル齒牙ハ〇・二六耗、兩隣接齒ヲ有スルモノハ〇・二四耗ヲ有ス、而シテ對合齒ヲ有セザル齒牙ハ最モ菲薄ニシテ、〇・二〇耗ナリ、即チ之レヲ以テ見ルニ、齒根膜幅員ハ齒牙ノ作用ト大ニ關係アルモノニシテ、作用時ノ齒牙ニ加ハル打擊大ナレバ大ナル程、齒槽骨ト齒牙トノ距離ハ大トナル、即チ齒根膜ハ肥厚セルモノナリ。

(四)齒根端ト齒槽窩底トノ距離ハ、平均〇・二五耗、根分歧部ニ於ケル齒根膜幅員ハ〇・三二耗ナリ。

(五)齒槽突起緣部ニテハ〇・三九耗(二六〇例ニヨリ)、齒根端ト齒槽突起緣トノ中間部ニテハ〇・一七耗(二七四例ニヨリ)、齒根端部ニテハ〇・二二耗(二二四例ニヨリ)ノ平均數ヲ示ス、依之齒槽ノ形ヲ想像スルニ、入口最モ大キク、中途狹マリ、齒根端ニ到リ再ビ擴ガリイルヲ知ル。

(六)作用セル齒牙ト、作用セザル齒牙ノ齒根膜幅員ノ尤モ狹キ部ヲ觀察スルニ、先ヅ作用セル齒牙ニ於テ(一〇八場所ノ測定ニヨル)其ノ七四%ハ中央部ヨリ下方ニ、二一・三%ハ中央部ヨリ上方ニ、而シテ殘ソノ四・六%ダケハ丁度中央部ニ見出サル。

又作用セザル齒牙ニ於テ(二三場所ノ測定ニヨル)、其ノ五四・五四%ハ中央部ヨリ下方ニ、三一・八一%ハ中央部ヨリ上方ニ、而シテ残りノ一三・六三%ダケハ丁度中央部ニ見出サル。

以上(五)(六)ヨリ考察スルニ、作用時ニ壓迫ノ加ハルコト大ナル齒根部ノ齒根膜幅員ハ他ニ比シ大ナルモノナレバ、壓迫ハ普通齒槽突起緣部ニ最モ大ニシテ、根部部之レニ次ギ、右兩者ノ中間部最モ小ナル譯トナリ、從ツテ、齒牙ノ支點トモ見做スベキ部ハ根中央部ノ猶根部ニ近キ個所ト考ヘ得ベシ。

(七)前齒竝ビニ小白齒ニテハ、多クノ場合其ノ齒根膜幅員ハ、齒槽突起緣部及ビ根中央部ニ於テ近心側遠心側ヨリ厚ク、根部部ニ於テ近心薄シ、反之大白齒ニテハ、齒槽突起緣部及ビ根中央部ニ於テ近心側遠心側ヨリ薄ク、根部部ニ於テ、之レト反對ニ近心側厚キヲ普通トス、但シ此等ノ差異ハ全テノ場合決シテ著明ナリト云ヒ得ズ。

(八)齒牙ノ唇舌の切片ヲ測定セル結果ハ、上顎ニテ唇側〇・二七耗、舌側〇・二四耗、下顎ニテ唇側〇・二一耗、舌側〇・二三耗ノ平均數ヲ示ス。依之見ルモ、齒牙ノ作用即チ齒牙ニ加ハル壓力ト齒根膜ノ厚サトノ間ニ一定ノ關係ノ存在スルコトヲ明ニ知り得ベシ。

(九)最後ニ著者ハ各動物ノ齒根膜幅員測定ヲ行ヒ、其ノ結果ヲ第

七表ニ掲ゲ居ルヲ見ル、測定セル動物ハ犬、豚、家兔、猿、狐、海狸、鼠、飛犬ニシテ人ト同様ノ個所ヲ測レリ、而シテ鼠切齒ニ於テ唇舌兩側ノ差異ヲ認メ其ノ平均數舌側〇・二三耗、唇側〇・一七耗ヲ示セリ、犬ニテハ平均〇・三五耗、又測定セシ動物中最モ厚キモノハ豚ニシテ、實ニ一・一二耗ノ厚サヲ示ス、尙犬ニ於テモ屢一・一二耗ヲ示セルモノヲ見タリト云フ。

齒科外科

顎骨ニ於ケル對照性纖維腫及骨纖維腫、 竝ニ其ノ病原ト處置ニ就イテ

Symmetrische Fibrome bez. Osteofibrome der Kiefer,
ihre Pathogenese und Therapie. Dr. G. L. Feldmann.
D. M. f. Z. Heft 12, 1928.

著者ハ、最近二ケ年間に、顎骨ニ於イテ、對照的ニ纖維腫、骨纖維腫ノ來タレルモノヲ九例認メ夫レニ就イテ報告ヲシテ居ル。此ノ患者ヲ性別ニスルト、男六人、女三人デ年齡ハ、十五歲カラ二十七歲迄ノ間デアツタ、ソシテ七例ハ上顎ニノミアツテ、他ノ二例ハ上下顎ニ有ツタ。

結論トシテ著者ハ、

一、顎骨ノ對照性纖維腫又ハ骨纖維腫ハ比較的稀ニ見ルモノデア